1953　昭和２８年４月５日発行　　鶴研
雑誌　平凡　４月号　５頁

憧れのコーラス　美貌と美声の２大スタア

高峰さんと鶴田さんが　なごやかな舞台裏のいこいのひとときに語る
希望対談 62 回はファン待望のあこがれの合唱！

当代随一の人気スター、高峰三枝子さんと鶴田浩二さんの舞台での初顔合わせは、今回が初めてなのです。文字どおり百万弗の大舞台を見逃してなるものかと、ここ大阪大劇の場内を早朝からぎっしりとうずめたファンは、一曲一曲に感激の拍手を送ります。さて、次の舞台がはじまるまでの幕間のひとときを、特にお二人にお願いして、初顔合せ対談をやっていただきました。

◆ポケットの中にハワイの暑さが……

本誌　おつかれ様でした。一日５回公演ていうのは、はたで見ていても、なかなか大変ですね。

高峰　私は吹込みや放送以外、舞台というのはあまりやらないでしょう。だから、はじめは、一日５回なんて、はたしてつとまるかしらと心配だったのよ、でもね、ファンの人たちが朝早くからつめかけて、私たちの舞台を喜んで見ていて下さるんだと思うと、疲れも何も感じないの。不思議ね。

鶴田　ほんとですよ。これは舞台に出ている人間でないと解らないことなんですね。

高峰　でも、やっぱり睡眠はとらなけりゃ駄目ね。睡眠の多い日と少い日では声の調子がとても違うんです。だから、楽屋で時間があれば、私はつとめて昼寝するようにしてるんですけど。……あら、こんな話してたらなんだが眠くなってきちゃった。（笑声）なにかちがう話しましょうよ。……鶴田さんハワイ面白かった？

鶴田　楽しかったなんてもんじゃないですね。とにかく仕事で行ったんですから。そりゃ、金と閑をウントコサ持って、遊びに行くんだったら楽しい所だと思うんですがね。

高峰　いまの季節でも、泳げるんでしょう。

鶴田　暑いというほどでもないんですが、水の中に入っても、まあ寒くないという程度ですね。

高峰　夜の浜辺なんかロマンティックでしょうね。

鶴田　いやァ、夜、海で泳ぎましたけどね、ロマンティックを通り越して、ちょっと薄気味わるいですね。あんまり雰囲気がありすぎて、妖気がただよっているというのかな、ああいうのは……

高峰　岩かげからローレライの歌かなんかがきこえて来るような雰囲気なのね、きっと。……　こちらへ帰って来たら寒さを人一倍感じるでしょう。

鶴田　帰って来て二日ばかりは、向うの暑さがポケットの中にまだ残ってるみたいな気がして、そう寒さを感じなかったんですが、三日目あたりから急にブルブルふるえ出しましたよ。その頃になっていきなり気がついたりしてるんですよ「あーあ、冬

というのは寒いものだ」なんてね。（笑声）なんだか変な調子です、夏を二度やったみたいな。

高峰　あの　ハワイでね……。

鶴田　あの、ちょっと待って下さいよ。そうハワイハワイとたてつづけに云われちゃ、喋るのは僕だけになっちゃいますよ。それじゃ、高峰さんの話が出て来ない。なにか共通の話題にしましょうよ。ハワイの話はやめにして……。

高峰　あーあ、惜しいとこだったわ。せっかく鶴田さんの独演会にしようと思ったのに。（笑声）

◆鶴田さんは礼儀正しくてケンソン家

高峰　同じ松竹にいながら、鶴田さんとは、あまり御縁がなかったわね。

鶴田　それが残念なんですよ。とにかく僕は「純情二重奏」の頃から高峰さんの大ファンだったのに。

高峰　それはどうも。ずいぶん昔の話ね。

鶴田　あの頃、僕は小学生でした。

高峰　ウソおっしゃい！（笑声）なんぼなんでも、そんなことないわよ。

鶴田　失礼しました。どうも僕は昔から算術が苦手なもんですから。（笑声）

高峰　三年前の「春の潮」が最初で最後だったかしら ―― 。

鶴田　でも、画面で顔を合せたのは一度だけですよ。心斎橋の上で、二言三言せりふのやりとりがあって…。

高峰　私たち、妙に大阪に縁があるのね。もっともあの心斎橋の場面はロケじゃなかったけれど。

鶴田　あの頃、高峰さんという人がこわかった。

高峰　あ～ら、そんな風に思ってらっしゃったの、いやだわ。いまは、そんなことないでしょう。

鶴田　いや、まだこわいです。（笑声）おつきあいしてみるとそうでもないんだけれど。

高峰　私って、いつもそういうこと云われるのよ。不思議ね。自分じゃ、とてもつきあいいい人間のつもりでいるんだけど。

鶴田　僕の場合は、生徒の先生に対する気持に似てるんですよ。

高峰　おやおや、大変な先生ね。（笑声）

鶴田　つきあいいいんだけど、何となくけむたいんですね。たとえば、淡島お景ちゃんや津島君の場合だったら、撮影所であっても「ヨオ！しばらくだね」てな具合に、軽くポンと肩でもたたけるんですが、高峰さんの場合はそうはいかない。つい「おはようございます」になってしまう。（笑声）

高峰　私がそうされてるから、こんなこという訳じゃないんですけれどね、私の鶴田さん論をのべさせていただきますと……

鶴田　ありゃ、大変なことになっちゃったな。弱ったな。（笑声）

高峰　鶴田さんて、非常に礼儀の正しい方ですね。私の知る限りではとてもキチンとし

ていらっしゃる。

鶴田　それほどでもないですよ。やだなあ。僕はそんな風にほめられると身体中でくすぐったくなってくるんですよ。

高峰　鶴田さんて、ケンソン家ね。

鶴田　とんでもない。ケンソンだなんて。

高峰　それがケンソン家の証拠じゃないの。（笑声）

◆こわいファン・レター

鶴田　高峰さん、レコードに最初吹込みしたのは、いつごろですか。

高峰　戦争前に「螢の光」を吹込んだのが最初。そういう映画があったんですよ。私はその頃から、ずーっとコロンビアです。鶴田さんは吹込なさる前から舞台で唄ってらっしゃたんじゃないの。

鶴田　それはね、こういう訳なんですよ。３年前だったかな、たしか夏でした。浅草の劇場（こや）で岩井半四郎さんや、阿部徹さんたちと御挨拶やったんです。その時ね、「鶴田ですどうぞよろしく」だけじゃどうも物足りない。何かやりたいんですね。思い切ってやっちまえっていう訳で、余興に唄っちゃったんです。ディック・ミネさんの「夜霧のブルース」をね。そしたら、意外にも客席から拍手が起りましてね（笑声）すっかりゴキゲンですよ。第一回の吹込はその後です。ポリドールで「男の夜曲」というのを唄ったのが最初です。

高峰　鶴田さんの唄い方、私好きよ。お上手 —— なのは勿論ですけどなにかこう、雰囲気を出しながらうたってらっしゃるという感じね。それが何とも言えない魅力なのね。

鶴田　恐縮です。（鶴田さん、さかんにテレています）

高峰　でもね時どきこわいファンがいますよ。雰囲気を歌に出そうとちょっと何かの拍子である部分だけ唄い方を変えて見たりするでしょう、すると大変、ファン・レターですぐ云って来ますよ。「この間の放送は、レコードと唄い方が違いますけれど、どちらが正しいんですか。」なんてね。よく聴いてるんですね。でも、こんなにも熱心に聴いてくれるのかと思うと、感激しちゃうわ。

鶴田　とにかく熱心ですよ。僕もやっぱり、そういうことがありますよ。だから、うっかりしちゃいられないですね。

◆浮浪児を救けた高峰さんの話

鶴田　さて、高峰さんの美談をおうかがいしたいのですが……。

高峰　あら、美談だなんて、何の話かしら。

鶴田　浮浪児を救けたとかいう話。

高峰　ああ、その話。救けたというほどのことでもないんですけど……。

鶴田　どこから連れて来たんです。

高峰　家の庭に寝てたんですよ。夜帰って来てね、ひょいと庭を見たら、芝生の上にな

にかいるんですよ。何だろうと思って近よって見たら、11ぐらいの女の子、一見して浮浪児と解るような汚い恰好してね。顔なんか垢で真黒。「あんたなぜこんな所にいるの」ってきいたら「すみません、ただ、あんまり芝生が綺麗だったもんですから、あの上で寝たら気持がいいだろうなァと思ってつい……」なんていうの。

鶴田　なかなかロマンティストだ。

高峰　話きいたら、戦災で両親も家もなくしちゃって、帰る所もないんですって。仕様がないから、すぐお風呂に入れてやってね、着物きせてやったら、案外可愛い子なの。それから、ずっと家いるんですけれどね、そうなると、学校へもやらなくちゃいけないでしょう。入学の手続きしてやったり……。

鶴田　大変だなあ。その子、高峰さんの家だと知らないで入ったんですね。

高峰　そうなの。それだけに、動機が天真爛漫で、気分いいでしょう。私の家と知って下心があって来たのでは、こっちでもやっぱり世話する気にならないわ。

鶴田　そりゃ、そうですね。しかし、高峰さんていい人だなあ。その浮浪児、ほんとにいい人に拾われたなあ。こりゃあ、表彰もんだ。（笑声）

◆若いアベックに幸あれ！

高峰　今も舞台の上からながめたら、若いアベックがずいぶんいました。ああいうのを見ると、何かこう、祝福してあげたい気持になって来るわ。いいものね。

鶴田　しかしいまの若い人たちは、僕らのあの年頃の時とは、随分違いますね。僕たちの学生時代は、いまほどセチ辛くなかった。

ポケット・マネーで映画も見られたし、お茶も飲めた。アベックの場合、そういう雰囲気も結構たのしむことも出来ましたね。ところがいまはそうは行かない。１５０円で大劇の「学生社長」とアトラクションを見に行こうと思ったら、一直線に大劇へやって来て、映画と実演で３時間をたのしんでそれで終り。そういう人が多いんじゃないでしょうか。青春というものは、もっとのんびりした、豊かなものであって欲しいのに、世の中がそうさせてくれない。

高峰　昔より恋愛や男女の交際が自由になったくせに、世間の一部では若いアベック達を美しいなと見てやらない傾向があるような気がするわ。何かというと、戦後派だとか、アプレだとか。戦後派というのを、無軌道の代名詞に使うのは可哀そうだわ。正しい人たちがいたり、間違った人たちがいたのは昔も間じなんですからね。

鶴田　僕はその戦後派という言葉が大きらいなんですよ。一体、戦後派というのは、何に基準を置いていうのか。何才から何才までを指していうのか、こんなあやふやな物のいい方は、第一無責任ですよ。だから、現代の青春には、だんだんと夢やうるおいがなくなって来る。たとえば、恋を語るにも昔は二人で散歩しながら、「月がきれいですね」といえば、それが「あなたと一緒にいると、月までが実に美しく感じられて来る」という愛の告白でもあった。ところが、いま、そんなまわりくどいせりふをいったら滑稽ですよ。二人の恋愛に、月などという中間物は不要、何でもかんでもそのものズバリ！（笑声）

高峰　　だから、はたはどうでも、自分本位に恋愛して行こうという気持も無理ないわ――何しろ、世の中って、冷たいものですからね。

鶴田　　その冷たい世の中にあって、浮浪児に情けをかけたりする高峰さんは、だからえらいと思うんだ！

高峰　　あらほめられちゃった。（笑声）

◆歌と映画をより多くの人たちに

鶴田　　高峰さん、これなんだか解りますか。迫っかけてもつかまらない。拾おうと思っても拾えない。作ろうと思っても作れない。捨てようと思っても捨てられない。逃げようと思っても逃げられない。停めようと思っても停めれないもの。ハテ、何でしょう。

高峰　　前に云ったのと、後に云ったのと、同じものね。……解らなわ。

鶴田　　人気！　そう思いませんか。

高峰　　な～るほどね。私、恋人かと思ったわ。（笑声）

鶴田　　僕は最近、いろいろ考えたんですが、けっきょく、歌謡曲にしろ映画にしろ、これは絶対に大衆ときりはなしては考えられないものですからね。また、こうして劇場で、金をとってお客を入れている以上、お客の欲するものを与えなければ、詐欺と同じですよ。

高峰　　そりゃそうだわ。ですからあの歌はよかったとか、あの映画は面白かったとかいう手紙を貰ったりすると、とても嬉しいの。

鶴田　　そこに僕たちの喜びや生甲斐があるんですね。もちろん、人気を獲得することが最後の目的であってはならないし、第一、つかまえようとしたってつかまえる訳には行かないんですから……。

高峰　　人気というものは、まわりの人たちがあたえてくれるものですからね。私たちはただお仕事に対して愛情と誠実ささえ忘れないでやっていればいいんですよ。そうでしょう。

鶴田　　同感ですね。では高峰さんこの次の舞台も、愛情と誠実さとをもって、ハリきってやりましょうよ。

高峰　　大賛成！　では、舞台でまたお目にかかりましょう。

（附記・新聞その他で報ぜられました鶴田さんの不慮の災難はこの対談の３日後に起ったのです。が、その後は順調に快方に向い、東京の国際劇場公演後の現在は、元気で松竹の「岸壁」の撮影に入っております）